

「宮の渡しから西の東海道」と言えば、「桑名まで海路七里」
ていばん が定番ですが、実は「東海道」と名付けられた西へ行く陸路が
りくろ あったのです。

それは、東海道の脇往還だった「佐屋路」とも違います。
わきおうかん① さやじ ちが

ただ、佐屋路が深く関係していました。

佐屋路は、熱田神宮南の現ほうろく地藏前で東海道から北
ぶんき へ分岐し、熱田神宮南門前から西門前を北上。金山駅南西で
みなみもん にしもん なんせい

西に折れ、尾頭橋から岩塚、万場、神守経由で木曾川支流の
おとうばし いわつか まんば かもり きそがわしりゆう

佐屋川東岸佐屋湊までを陸路。そこから船で佐屋川を下り、
② とうがんさやみなと りくろ

中州を縫って揖斐川西岸の桑名川口港まで、三里の渡しで
なかす ぬ いびがわ くわなかわぐちみなと さんり

川路を行くルートでした。ところが、幕末まで相次いで行わ
かわじ

れた新田開発や、長い間の土砂の堆積で佐屋川が埋まり、
しんでんかいほつ あいだ どしや たいせき う

三里の川路は機能を失いつつあったのです。
かわじ きのう うしな

そして、明治元年（一八六八年）九月二六日、事件が起きま
く とうじつ③

す。京都から東幸される明治天皇ご一行が、佐屋経由で熱田
きょうと さしまわ おめしせんしろとりまる

に向かうため、尾張藩主差回しの御召船白鳥丸で桑名を
しめいりゆう さかのぼ きゆうきよにんぶ

出港したものの、佐屋川を遡れず、急遽人夫四千人を

動員した川浚えの挙句、佐屋よりも三・五キロ南の五之三村このさんむらやけだみなと④ ちやくせん よぎ 焼田港で着船を余儀なくされたのです。

これは、当時の明治政府にとって一大事でした。そこで、

明治二年頃、弥富の村田宗之助という人が桑名から船路一里ふなじいちり

の前ヶ須「ふたつやの渡し」と、陸路で新田地帯を經由してしんでんちたい

熱田の「宮の渡し」とを結ぶ「前ヶ須街道」を提案します。まえがす

これを受けて名古屋藩庁が新しい道を造り、国も明治五年なごやはんちよう⑤

(一八七二年)一月一日付で太政官布告を出しました。だじようかんふこく

とうかいどうをさやじよりみちがえす さら びしゅうかいさいぐんふくた⑥ まえがす 東海道佐屋路道換、更二尾州海西郡福田・前ヶ須

りようえき おかれそうろうによりこのだんあいたつしそうろうこと 両駅ヲ被置候条、此段相達 候事

というものです。

これにより「前ヶ須街道」は国道「東海道」となり、福田とふくた

前ヶ須が宿駅となりました。これが「明治の東海道」です。

明治の東海道は、明治六年に一等道路、明治九年に一等いっとう

国道となり、明治二二年の東海道本線開通まで、交通の大だい

動脈でした。その後も昭和九年(一九三四年)の国道一号線ごうごみやく

開通までは、熱田以西の幹線道路として機能していました。あつたいせい かんせんどうろ

今、明治の東海道の跡を、宮の渡しからたどってみます。あと

まず、神戸町の船着場跡から堀川沿いに北西へ向かい、旧魚市場手前の大瀬子橋で堀川を渡ります。この橋が明治四十二年に架けられるまでは、南側、現在大瀬子浜公園のある場所に「大瀬子の渡」がありました。景清社から来る道の突き当たりです。対岸の旧船方新田側は、現在、民間会社の敷地ですが、堤防の南西には、今も千年方面への道が真っ直ぐに伸びています。渡し場の廃止で、東海道はやや北回りの大瀬子橋ルートに変更され、現千年一丁目バス停付近で旧道に合流します。ここから熱田高校の東を南下、現千年水処理センター正門前の八幡神社南を右折して、千年小学校の南を西に抜け、千年交差点の二〇メートル北に出ます。これが船方新田南端の道で、左のマーケット側が作良新田（現港区）です。ただ、この道は大正始め頃には、千年水処理センター北西角から八幡神社裏を通って斜めに千年交差点に出る新道に付け換わりしました。

千年交差点から、東海通を熱田区と港区の境界に沿って西へ四百メートル程行けば、熱田区ともお別れです。

明治の東海道は東海通の日之出橋で新川を渡ったところ

で左折。三百メートル南の天王社前を右折して福田新田ふくだしんでんを
過ぎ、河合小橋、日光大橋で蟹江町を通過します。かわいこぼし につこうおほし¹¹ かにえちよう¹²

続いて弥富市(旧海西郡十四山村)に入って善太川を渡り、やとみし かいさいぐんじゅうしやまむら ぜんたがわ
西岸を左折して南下。一キロ程で西に直角に曲がり、亀ヶ地せいがん なんか ちよつかく

から東蜷、西蜷を経て子宝橋、弥勒寺前から子供の国ひがししじみ にししじみ¹³ へ こだからばし¹⁴ みろくじ¹⁵ こども くに
北交差点を右折。筏川沿いを北西に行き、六条津島神社のきたこうさてん いかだがわぞ ほくせい ろくじようつしまじんじや¹⁶

左側から平島に入ると旧弥富町です。筏川は、木曾の木材へいじま いかだかわ
を筏流ししろとりで白鳥に運んだのが由来です。さらに筏川沿いを西

に行くきゆうつつみぞと「おみよし松」¹⁷があります。ここから旧東海道は、
旧堤沿いに、現日の出小学校の敷地内を通っていました。

その先が前ヶ須まえがすです。弥富市歴史民俗資料館前から交差点やとみしれきしみんぞくしりようかん¹⁸
を直進ふたまた。二股に分かれた右が新道左が旧道です。最初の角をしんどう きふじよう かと

左折して二〇メートル程で終点「ふたつやの渡」わたしに到着です。
今の木曾川は、ここから西へ百メートルの位置です。

なお、この石碑の南東約百メートルの海部幹線水路沿いにあまかんせんすいろぞ
「竹長押茶屋」¹⁹があります。明治五年(一八七二年)、名古屋たけなげしぢやや¹⁹

屋城御深井丸の休息茶屋の一部を移築したもので、堤を登おふけまる きゆうそくぢやや いちく
った玄関脇に「明治天皇前ヶ須御小休所」の石碑があります。

【注①～⑱】

- ① 脇往還…江戸時代の主要五街道以外の主要な街道。佐屋路は七里の渡しのパイパスとして陸路六里川路三里。海路の危険を避けるため、利用頻度が極めて高かった。
- ② 佐屋川…かつて祖父江(木曾三川公園)で木曾川から分岐、前ヶ須の北で木曾川に注いでいた派川。天正一四(一五八六)年の洪水で河道が西に移るまでは木曾川本流。津島天王川を支流に持ち、江戸初期は流量も豊富だったが、徐々に土砂で埋まり、明治三二(一八九九)年廃川。
- ③ 東幸…江戸は七月に東京となる。この時は行幸。翌年東京奠都(てんとと東京も京都も都)
- ④ 焼田港…愛知県弥富市五之三町川平九三。佐屋港代替目的で文化四(一八〇七)年開港。石碑有。
- ⑤ 名古屋藩庁…明治二年の版籍奉還で、藩主は名古屋知藩事となっていた。廃藩置県は明治四年。
- ⑥ 福田…旧海東郡福田村。海西郡は間違い。明治初期に福田新田から改称。現在は名古屋市港区の一部。なお、海東郡と海西郡は大正二(一九一三)年の合併で海部郡となる。
- ⑦ 大瀬子の渡し…架橋による廃止は、百曲街道の木之芽の渡しに白鳥橋が架橋された翌年。
- ⑧ 景清社から来る道…熱田神宮西門前から北端は名古屋城正門に通じる本町通に接続。
- ⑨ 東海通…名古屋市道東海橋線の通称。西は港区河合小橋から東は緑区徳重交差点までを結ぶ市道。正式名は中川運河に架かる橋の名に由来。通称は一九八四年に名古屋市土木局が市民公募で決定したため由来は不明だが、千年交差点と日之出橋間は明治の東海道と一致
- ⑩ 福田新田…寛永一七(一六四〇)年、鬼頭吉兵衛景義が開発。八田村の景義は、夢枕に立った白衣観音のお告げにより白鳥のとまる位置に堰を築き、困難な工事を成功させた逸話と、熱田新田三十三番割に各々観音堂を建てたことで知られる。福田新田には分家の鬼頭勘兵衛(重勝)の屋敷跡があり、明治天皇福田行在所碑がある。なお、弥富の子宝新田も景義が開発した。
- ⑪ 河合小橋、日光大橋…明治初期は蟹江川河口が北にあり、日光川を渡る河合大橋だった。
- ⑫ 蟹江町…河合小橋から日光大橋、鍋蓋新田まで旧東海道が通り善太橋から弥富市(旧十四山村)。
- ⑬ 西蜆…明治天皇西蜆小休場の石碑がある。明治一三年の行幸を記念して昭和一二年建立。
- ⑭ 子宝橋…橋の南を直進し子宝新田へ。秋葉三尺坊に木造阿弥陀如来の珍しい半迦惟像安置。
- ⑮ 弥勒寺…孝女曾與の墓、銅像阿弥陀如来坐像などがある大きな寺。なお東八〇〇メートルの場所に孝女曾與宅跡。
- ⑯ 六条津島神社・⑰ おみよし松…木曾川が天王川と繋がっていた頃、津島天王祭の神葎船(みよしぶね)が漂着したことが由来。
- ⑱ 弥富市歴史民俗資料館…旧弥富町役場跡に建ち、弥富の歴史を学べる。ガイドマップ等を発行。竹長押茶屋…前ヶ須の佐藤七三朗氏が購入し、移築。各部屋に使用された竹の半割長押が由来。昔は二階から筏川船着場と木曾川の絶景が一望できた。長押は壁で柱と柱を繋ぐ横木。

【参考にした文献等】

- 『佐屋路 歴史散歩』日下英之著 七賢出版 一九九四年
- 『なごやの古道・街道を歩く』池田誠一著 風媒社 二〇〇七年
- 『やとみ ものしりブック』弥富市歴史民俗資料館編集 弥富市教育委員会 二〇一五年
- 『文化財ガイドマップ 弥富市の文化財』弥富市教育委員会 二〇一八年
- 『明治二十一年名古屋近傍図』第三師団参謀部 一八八八年
- 『熱田区の歴史』三渡俊一郎著 愛知県郷土資料刊行会 二〇〇六年
- 『愛知県史 第三巻』愛知県 吉川弘文館 一九三九年
- 『ミナトガタリ第一〇弾 なごや古道・街角案内池田誠一「ミナトを語る！」第九章 国道 東海道』
- 二〇一六・三・インタビュー 名古屋公式ウェブサイト(二〇一八・六・一〇最終アクセス)



明治初期の東海道と佐屋路